

## 女性に對する注文

法學博士 新渡戸稻造君

### ▲心を大きく持て

女子の處世の上について、私が今日女子に向つて、第一に注文したいことと云ふのは、社會の各階級を通じて、我が凡ての女性、殊に妙齡の婦人方が、今少し心を大きく持てと云ふことである、斯ふ云ふと、何だか修身の講話のやうに聞えるが、そんな鹿爪らしいことではなく、自分の感慨を其儘に述べるのである。

一体女子と云ふ者は、氣が小さくて、其上非常に弱い、故に優しく、萬事が心細く、哀つばいので、可愛らしいと思はれる、小説を讀んでも、演劇を見ても、凡て弱々しい、哀つばい所が、主眼となり、又た善い點としてあるやうだ、處が我輩は夫れと反對に、女性に對して、心を飽くまで大きく持てと、忠告するのである、但し是れは、圖太くなれ、圖々しくなれとの意味でないから、どうか誤解のないやうに願いたい。

### ▲ペンをかく勿れ

以上述べた、心を大きく持てと云ふことは、之を要するに、少しの事に心を痛めてはならぬと云ふ點に存するのである、人世は女性諸子の想像するより、廣くして且つ大きいものであるから、些々たる事に、心配する 必要はない、彼の人が斯ふ云ふたからとて、夫れを直ちに氣にする、或る者が斯う思ひはせぬかと云つて、心を痛める、所謂薄氷を履むが如く、深渊に臨むが如き態度が多い、誠に憐むべきことである。自分の心に確とした、誠の心、自

信の力があるならば、言いたいことを云び仕たいことをして、差支ない筈である、併し此の仕度と云ふのは、前に述べた、誠の心よりすべき、條件付のことである、私が曾て富山の高等女學校で一場の演説を希望されたから、生徒諸子から、問題を請求して呉れと注文すると、「貴人の面前にて臆面を取らぬ方法」と云ふことであつたから、私は今申したやうなことを、敷衍して申すには成る程我輩男性とても高貴の御方に拜謁する時には、自然に肅然として、鞠躬如として、敬意を表する、又た華族あたりに逢ふとしても、まさか威嚴に打たれたると云ふやうなことはなくとも、マア君と申すやうなことは云ひ得ぬ、是れは誰しも同じことであらうと思はれる、併し此場合のものは、決して氣が弱い、心細いと申すのではなく、即ち禮である、禮儀を守つて云ふべきことを云ひ、行ふべきことを行ふ、何の憚る所があらうか、かう遊ばせ、あゝ遊ばせで、言葉は丁寧でも差支ないが、恐れると云ふ必要は少しもない、何でも淡泊がよろしい、處世と云ふことは、餘りペソをかいて居るに及ばぬことである、即ち心を大きく持たねばならぬ。

### ▲感情の自然的發露

心細い悲しいと云ふことは、強ち悪いことではありませぬ、私の申すのは、餘りに感情を抑へつけて、世の中の事に取り越し苦勞をして、くよくよせぬことである、即ち心に於て誠さへあれば、泣くも笑ふも宜しい。是れこそ、純潔なる感情の、自然的發露であつて、少しも悪いことでは、ないと申すのである。私は先日旅行して居ります時に、東京の宅に置きます、少女學生から、一通の書面を受取つた、是れは親のない小女であつて、氣の

毒な身の上であるので、私が引取つて、世話をして學校へ通はせて置くのである。其の書面の要領は、「叔父さん、私のことを常に叔父さんと申して居る」私は今日學校へ行きましたら、四五人仲好しの生徒が、私の處へ参りまして、多分雜誌か新聞にあつたことでありませうが、私に向ひ貴方の叔父さんは、大層小兒好きで居つしやるそうですが、ほんとに好いのね——と非常に羨みますので、あとから此四五人の身の上を聞きますに、四人共両親がなくなつてしまつたさうですし、一人は父だけがありますが、石ぞうの様なものだ云ふことでありました」と書いて其末に『昨晚は私獨りで二階に勉強して居りましたら、風が吹いて何だか寂しくてくく堪え切れませんでした』と書いてある、私はこれを讀んで實に亡父の命日でありました』と書いてある、私はこれを讀んで實に同情に堪いませんでした、何と感情の自然的發露ではありませぬか。

### ▲神聖なる感情の發露

感情の自然發露は、上述の如く少しも悪い事でないと同じく、亦た神聖なる悲哀は決して悪いことではない、これは心の洗濯である、私は此年になつても、一年に一廻宛は亡くなつた母の手紙を取り出して、悉く讀みますが、在世の時の教訓が歴々と繰り返されるのであります。また私は一年に一回宛は必ず田舎の郷里へ参ります。併し私は耶蘇ですから、位牌を持ちませぬが、何等の形もない、床の間へ花を飾つて、亡き父母の追念を致して居ると、環堵蕭然として、孤身水の如く、宛ら暮れ行く秋のやうな心地がして、心の底が澄み通るやうになります。所謂神聖なる閑寂は、心の洗濯を致すものとは、是等のことでありませう想ふに、

婦人諸子も、さう云ふ場合があらう、時には亡き両親方、或は姉妹方のことを思ふとか、乃至は自然の感情の爲めに泣きたいことなどがあらう。此時は人の居らないやうな室で充分お泣きなされるがよい、必ずしもこつそり便所等へ行つて、めそ／＼やるに及ばぬ。充分に大聲を揚げて、泣くが宜しい、また反對に、笑ふも嬉しいことかあつたら、此場合にも同様大口を開けて笑ふがよろしい。秋の中へ頭をつゝこむやうな、卑怯のことをせぬがよい、即ち悲喜哀樂、神聖なる感情を發露するは、固有の天賦の力を充分に、發露するに必要なものである。

### ▲心を廣く持て

次に女性方に注文したいのは、心を廣く持てと云ふことであります、即ちお互ひに諍らぬことの爲めに、悪く云ひ合つたり、恨み合つたり、拗れたり、こぢれたりせず、薩張りとして厭味のない様にせねばならぬ。元來女性と申す者は、兎角に嫉妬深い者で態々他人の欠點や、短所を見立て、彼是れ餘計な悪口するものである、他の婦人の心術や容貌に就て、扱てはあの指環がどうのりばんが、斯うのと、つまらぬ服装や、髪飾りのことまで、論らう。殊に婦人の特徴として、化粧のことに就て、短所を見立てる癖がある。何も厭なことを態々自分の耳目に訴へて、不愉快な思ひをするに及ばぬ。是れ皆な心の大きくない、狭い／＼了簡から起つて來ることであるから、これには相當の團體のやうなもの、假令ば悪口をせぬ會とか云ふやうなものを、組織して貰ひたいのである、私は十六歳の時、人の悪いことを見聞すると、不愉快至極なので、爾後二十幾つの歳まで、成るべく善いことばかり、見聞するやうにした。また私は非常に短氣で困つたので氣に喰ぬ時

は早速に眼目して丁ふ習慣をつけた是れが爲め二十二歳の時、米國へ行つて随分笑はれたこともあつて、是れは近眼の爲めたと言譯したことさへある。併し此習慣の爲めに、大概の人の醜い容貌や、不具の人等をみても、其長所の方を以て、短所を償ふやうに同情すると云ふ風になつた、是れは私が聖人ぶるでも何でもないが、實際經驗的事實である。苟も此同情の心あらば、所謂人間到處有青山で何等の恐るゝ處のない筈である。今を去る二百年前、英國に於て、アジソンと云ふ、人格の極めて高い、有名な文豪があつた。其人が曾つて或る雜誌へ書いた一節に、『二六時中婦人が化粧の爲に費す時間は十時間ある』と云つた。私は平生の實驗上、婦人が如何なる仕事に、如何程の時間を消費するかについて調べて見たことがあるが、人の噂をすることが最も多く、即ち一時間に於て、正味の話は五分位、あとは皆人の噂や乃至は之に關係したことで、持ち切つてゐる。そしは其噂も人格を賞揚するとか、徳操を欣慕するとかなら、賛成すべきであるが、前述の如く、只だ詰らぬことばかり。多いと云ふのは、誠に嘆しいことである。

### ▲心を強く持つ

其次の注文は、心を強く持てと云ふことである。是ば一寸聞くと、優しいと云ふのと、反對に聞えるやうであるが、決して女だてらに、ツン／＼して威張れと云ふのではない、即ち意志の堅實ならぬ爲め、彼の女學生等が誘惑に陥り、身を過るやうになるのが多いのである。結局、左様の場合には、充分誘惑に反抗して打ち克つ意志を持たねばならぬと云ふことである。現今彼の女學生問題の如き、初よりして女學生其者の墮落するのではなく、専ら機會に於て誘惑が起り、悪いと知りつゝ、其誘惑に反抗する堅

實なる意志に乏しく、不知不識の間に、誘惑の深き淵に沈んで、遂には如何に後悔しても、所謂驕馬も及ばぬ場合となるのである。醜業婦の如きものは、イザ知らず、苟も行末賢母良妻たるべき女學生が詰らぬ誘惑の爲に、一生の清操を傷くとは痛嘆すべきことである。

### ▲人形ぢやないもの

私は先日北越地方を旅行して、長岡の、某旅館に投宿したことがある。見ると同家の娘のおミツといふ、七ツ計りの恰と人形のやうな愛くるしい、小兒が下女を相手に、遊んで居る、私は性來の子煩悩であるから、下女に頼んで連れて来て貰つた、そしてミツぢやんは恰ど人形のやうだと、譽めて、彼方を向てお見せ、此方へ來てお呉れと云ふ調子で遊ばせやうとすると、ミツぢやんは背向きになつて、却々承知しない、で下女が何故さう怒つて居なさるかと聞くと、『人形ぢやないもの』と云つて頭を振る。私は此一語を聞いて、ひどく感じた、成る程さうだ、此ミツぢやんは、人間である、人格を備へて居る人間である、決して人形ではない、従て私が、私の精神は死も角、之を人形扱ひにして、弄ばうと云ふのは、甚だ申譯ない次第であると、ホト／＼感心致しました。

### ▲美しき同情

最後に諸子の爲めに、私が米國で實見した、美しい同情についての、お話を申し上げます。私の米國留學中、或る時友の下宿屋へ訪ねて行た所が、折悪しく留守であつたので、歸らうとすると、下宿屋の主婦が、少し話してお待ちなさいと云ふ、茲に一寸御断りしたいのは、米國の下宿屋のことである。日本では普通一般の營業者が多いが、米國で

は青年書生を養成監督しやうと云ふ、理想を持つた、上流以上の人が多いやうである、従つて却々教育にも富んで居る。そこで私も然らば少々御邪魔になりませうと云つて、主婦と種々の話をして居ると、此家の愛嬢で、ルイザと呼ぶ七つ許りのが、チヨコと来て、切りに卓の周圍を飛廻つて居たが、纏て私の顔をジツト見て小首を傾けて居りましたが、遂に母の傍へ寄つて、何か小聲で頼と尋ねる様である。すると母親は私にさも極り悪るさうに、ノックと制止する、そこで私は性來の子供好きだから、イヤ奥さんお嬢さんは、何か仰つしやる様子ですが、私に聞かせて下さいと云ふと、主婦は實は貴方を見て、切りに、印度から来た、御方がと聞かれますので、妾が印度の方ではない、之は日本の方だと説聞せたといひつゝ、是には、理由があるとの話である。夫は私の訪問した十日許り前のこと、此ルイザは、母親に連れられて、さる日曜學校へ行つた、其時に耶穌の宣教師で、永らく印度で傳道をして、歸つて来た人が話をした、印度のマドラスの町の片田舎に、七つになる憐れむべき孤兒があつて、病氣に罹つて非常に苦しむで居るので、此宣教師が見舞に行き、色々慰めると、孤兒は苦しい息の下から、少しも苦しくはありません、早く父母の居る天國に行きたいから、モット病氣が重くなりた、と返事をしたと云ふ話を聞くと、ルイザは小兒世にも、印度の孤兒が氣の毒でく堪らず、宅へ歸つてから、地圖を開いて、母に印度の方角やら、何やら色々なことを問ひ、其日よりして、病少女の病氣の一日も早く、平癒するやうと、朝夕二回宛、神に祈りを捧げて居たさうです。ところへ私が参つたので、私の顔色が黒かつたから定めし印度から来たものと合點して、憐むべき病少

女は、モロ病氣が癒つたか、どうかと母に問ふて呉れと謂つたのであるとのことである、私は此同情深き天來の福音を聞いて、一種のインスピレーションに打たれて、衷心から尊敬の心を以て、ルイザに云ふには、御安心なさい、御嬢様、若し天に於て、誠の神様があるならば、お前様の祈禱を必ず聞召して、必ず願を聞かれるであらう、印度の孤兒は、今頃スツカリ平癒して居るに相違ありませんと云ふと、ルイザは非常の満足で、感謝を其愛くるしい笑顔に見せたのである、

(女子處世百話)

### ● 地理標本繪葉書帖

女子高等師範附屬小學校にては先頃より本校卒業生の全國各地にあるものに際して各地方の名所古跡等の繪葉書を蒐集し地理教授の參考にせんと企てつゝ、ありしが結果は頗る良好にて此處數日の中に殘る僅々のものを集め終るときは居ながらにして全國の風物を見るを得可しと云ふ。面白き企てなりと云ふ可し。